福祉文化通信

～well-beingへの道～

2013.12.15
vol.72

●発行者／広報委員会
稲田泰紀　関矢秀幸　馬場　清
●制作：山河
●印刷：協友印刷

日本福祉文化学会事務局　〒165-0026 東京都中野区新井 2-12-10 芸術教育研究所内　Tel/Fax：03-5942-8510　E-mail:fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp

日本福祉文化学会 第24回全国大会が終了！

大会の全体総括

大会実行委員長：島田治子

特別講演：菅野飯舘村村長

9月28日、29日開催の第24回日本福祉文化学会全国大会東京大会は、無事、終了いたしました。1日目は108名、2日目は90名のご参加をいただき、登壇者・たくさんのボランティアの方々を含め、すべての参加者に御礼を申し上げます。

今大会では「暮らしの中の福祉文化を問い直す」というテーマを掲げました。震災・放射能汚染による被災の真っただ中にある福島県飯舘村・菅野典雄村長の「経済より命」という重い言葉に心を揺さぶられた参加者は、オペラ歌手・村山岳さんの歌声に癒され、福祉文化の一端を体感できたのではないでしょうか。

5つの交流分科会と研究発表会、及び2つの委員会企画、そしてパネルディスカッションの登壇者も含めて、多種多様な立場、考え方、生き方の方々にお話しいただきました。聞き手もそれぞれ違う場所に住み、異なる価値観を持って暮らし、異なる問題や課題に直面しているので、多様な選択肢があったのは自分の暮らしを見つめ直す上でも、他者の暮らしの問題に気づく上でも、良かったのではないでしょうか。

当日、書いていただいたアンケート結果を見ても、それらのことが裏付けられています。「勉強になった」「参加してよかった」と多くの方が高い評価をして下さいましたし、部屋移動をせずに討論するという新しい試みについても否定的なご意見はありませんでした。若干のご批判も、学会をさらに良くするためのご意見と受け取れる温かい内容で、皆様の学会に寄せる熱い思いを強く感じました。

特別公演：村山さんのオペラ♪

「暮らし」というテーマは、一見、平易なようでいて、実は最も難しいテーマであったのではないかと、しみじみ感じています。今大会だけで問い直しが全てできるものでも、答えが出るものでもありませんから、今後も引き続き、それぞれの場で考え続けていかなければならないでしょう。

体験劇はるなが池袋にやってきた

特別講演

『までいライフ』で求めた豊かな暮らしの今を語る

（報告者：馬場　清）

今から14年前、福祉文化現場セミナーが行われた福島県飯舘村。そのすばらしい村づくりが、放射能によって破壊され、村民は今なお全村避難を強いられている。その飯舘村から、菅野典雄村長に来ていただき、話を聞いた。

現代を「第3の転換期」ととらえる菅野氏は、これからは「バランスの時代」であると主張する。そして「お金が大切にされる世界」からの脱却をめざして、「ていねいに」「心をこめて」といった意味の「までい」ということばを村づくりの基本に据えてきた。

しかし「3・11」は、それまでの村づくりを全面的に破壊した。そして原発による被害は他の災害とはまったく異なる「質」をもっていると語る。それは住民の健康被害や環境破壊はもちろんのこと、人々のつながりを分断したことによる。

だから今こそ、「バランス」感覚を磨き、「いのちを大切にする暮らし」を目指して、人々のつながりを取り戻す村づくりをやっていかなければならないと話された。

飯舘村／菅野典雄村長

村長のお話に聞き入っています。

交流分科会

●第1交流分科会「災害支援と福祉文化」

（報告者：石田易司）

福島県飯舘村菅野典雄村長の特別講演を受けて、飯舘村高橋政彦健康福祉課福祉係長と中井田多美子やまゆり保育所所長のお二人をパネリストに、原発爆発後の村から避難している村民の生活を伺うこと、そして、私たちに何ができるのかを目的に、分科会を行った。

村長のいる打ち合わせの場では全く無口で一言もしゃべらなかった高橋係長が、本番では能弁で、避難した高齢者や障害者の実態をわかりやすく話してくれて、役場の職員の大変さがよくわかった。しかし、それは行政依存だなど、指定討論者岡村ヒロ子理事と藤原一秀会員からの質問、会場のみなさんの意見など、活発に交流ができた。当時の状況を描写した「避難弱者」（東洋経済）を勧めます。

●第2交流分科会「地域文化と福祉の創造」

（報告者：多田千尋）

福祉と地域文化の融合を目指す分科会は、5回目を迎え、関東圏から3実践が寄せられた。

1つ目は、わらべうたを通して、住民が独自の生活文化を掘り起こし、世代間交流で共有、伝承し、より強いコミュニティづくりを目指す活動。

2つ目は、かつての奥会津の暮らしを、子どもたちがお年寄りから「聞き書き」し、地域の生活文化を浮かび上がらせることにより、奥会津文化を次の世代へつなぐ活動。

最後に、東京の妙正寺川流域での染色業を復活させ、染色関連業と商店会、町会という既存の組織と住民をつなぎ直し、新しい形の共同体を築く活動。

いずれも、地域の文化を掘り起こし、今の時代に合う形での活用を目指す、すぐれた実践であった。

●第3交流分科会「楽しみの福祉文化」

（報告者：園田碩哉）

会場いっぱいの参加者で熱気あふれる会となり、福祉現場での「楽しみ」や「遊び」の現実とあるべき方向を考えた。「盛り上がるレク」だけでいいのか、ただの遊びになっていないかという高橋紀子氏の問題提起から入り、楽しみどころでない現場の厳しい状況が中野ひとみ氏から語られた。「楽しんでこそ人が変わって行く」という方向で議論が進み、松沼記代氏はレクリエーションを介護のシステムに入れることの必要性を主張し、佐藤喜也氏は「権利としてのレク」の視点を打ち出した。フロアからもレクやアクティビティの定着と拡大を図ることの大切さが交々語られ、効果を明確にしてエビデンスを発信することや専門職の確立を目指すことなどが確認された。

●第4交流分科会「ユニバーサルデザインと人々の暮らし―高齢者や障がいを持つ人たちも満足する衣服に近づくために―」

（報告者：塩田公子）

高齢者・障がい者とともに生活を含めた衣服について考え、2年前に会社を設立し、新しいファッションスタイルを提案している渡辺氏のお話を伺いながら、製作した服を見せていただいた。講演後、衣服を実践的に考えるために、意見交換の場を設けた。参加者全員から質問や意見等があり、具体的な内容が積極的に話合われた。

参加者と一体となって分科会を開催

●第5交流分科会「マイノリティと現代社会」

（報告者：阿比留久美）

第5交流分科会では、3人の知的障害を持つ当事者の方々に、自ら司会進行をしていただきながら、会社や作業所で「働く」ことへの思いを語っていただいた。

仕事の話のみならず、趣味や本人活動のこと、社会や周囲に対する要望など、幅広い報告がなされ、「働く」ことは「暮らし」の一部として他の要素と切り離して考えることはできないことが浮かび上がってきた。

また当事者の方から、あらゆる人がやさしい社会になってほしい、自由に暮らしていきたいという思いが述べられ、当たり前のことではあるが、障害の有無にかかわらず、生きやすい社会や望ましい暮らし方には共通する事柄が多いことが確認された。

委員会企画

1 実践と研究の融合

（報告者：マーレー寛子）

これまでのこのセッションでは、実践家と研究者がそれぞれのテーマで発表頂き、別々の議論をしてきました。今回は初めて、共通テーマを掲げ実践家と研究者双方の視点から発表してもらい会場全体で議論を進めてみました。

「職員の質」という福祉サービスの根幹となるテーマを「八王子平和の家」の川村氏からは、職員を育てる上での組織のあり方について示唆がありました。石井バークマン氏からは、職員研修の意義やあり方についてスウェーデンでの経験やデータをもとに説明下さいました。お二人の発表と議論から実践に根差した具体的な視点の重みと、データの蓄積の重要さを私達につきつけて頂いたと思います。今後もこのような共通テーマを持ってさらに実践と研究が融合できるよう深めていけたらと思います。

2 福祉文化研究のねらいと方法

（報告者：馬場　清）

研究委員会企画では、薗田碩哉顧問より「福祉文化研究のねらいと方法」と題して報告があった。

薗田報告では、福祉文化研究とは「福祉文化の研究」ではなく、「福祉の文化研究」であり、だからこそ「文化」のとらえ方を議論し、他の社会福祉研究と区別する必要があると主張する。そして文化をとらえる4つの見方を説明し、中でも「芸術文化」及び「カルチュラルスタディーズ」の視点から見る福祉研究こそが、福祉文化学会の研究の方向性であると述べられた。

その後の議論をふまえて報告の詳細については、今年度の研究誌に論文を掲載予定である。また「よもやまゼミナール」でもさらに議論を継続して行うので、興味のある方は参加していただきたい。

パネルディスカッション

暮らしとしての福祉文化を問い直す

（報告者：島田治子）

新潟水俣病患者を40年余りにわたって支えている当地出身の旗野秀人さん。20年前に宝塚から丹波へと移り住み、丹波の地域おこしに活躍する能口秀一さん。岩手県・陸前高田の復興計画の一環として、障がい当事者も含めて障がい者福祉計画などの作成支援に当たっている東京住まいの河東田博さん。

住む地域も活動内容もかかわる人々も異なる3人のお話は、ばらばらなようでいて、「暮らし」を軸に考えてみると、いくつもの共通キーワードが浮かび上がってきました。よそ者の目による暮らしの見つめ直し、大自然から一輪の花までの自然との共生の仕方、次世代へのつなぎ方、自分の立ち位置、人との距離の取り方、場づくり、当事者の声などなど。これらの言葉は、その地域ならではの実践方法が見つかった時、初めて生命が吹き込まれ、その積み重ねが暮らし文化となっていくのではないでしょうか。そこにこそ「生きていてよかった」と言える〝豊かな暮らし〟が誕生するのだと思えました。

未来のバトンを手に…能口さん

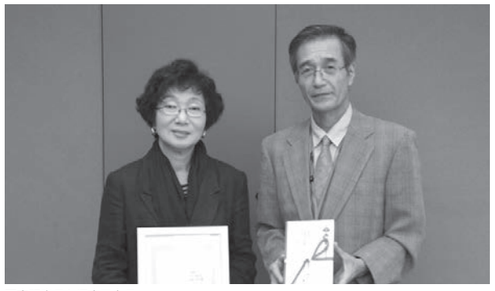
実践学会賞受賞

第9回福祉文化実践学会賞を「社会福祉法人泰生会総合ケアセンター泰生の里」が受賞！

社会福祉法人泰生会が宇佐市と別府市において運営する総合ケアセンターでは、利用者の出番を作り、地域住民との「共生」を視野に入れた専門性のあるケアと共に、福祉を地域生活文化のあり様と捉え、地域住民を巻き込み、利用者の個を大切にし、夢や希望を紡ぎ、創造性豊かな、地域でのヒューマンな幸せづくりを目指す実践活動を続けてきたことが受賞の理由です。

理事長の雨宮洋子氏は、「認知症の方を生活の場に戻したいと始めた活動を、このような形で評価していただきとてもうれしい」と喜びを語られました。

尚、学会賞賞金につきましては、全額、当学会にご寄付いただきました。心より御礼申し上げます。


雨宮理事長と河東田会長

学会会員総会で2014年度
事業方針・予算を承認

東京大会2日目の朝8時30分から学会会員総会を開催しました。早朝にも関わらず33名の会員に出席いただきました。主な議題は2012年度の事業報告と決算および2014年度事業方針と予算の承認。さらに速やかな情報提供のためにメーリングリストの整備とブロックごとのメール送信システムの運用などあらたな取り組みに対して承認されました。現在、ブロック活動が確実に定着しており、それらの活動を通して新しい会員も増えています。ぜひ会員の皆様もご自身の所属ブロックの活動に友人もお誘いいただきご参加ください。

●2014年度　日本福祉文化学会事業方針

1. 福祉文化研究の新たな展開
2. ブロック活動・委員会の組織的運営と会員参加活動の促進
3. 災害支援のための研究および実践活動の継続的推進
4. 福祉文化現場セミナーの継続と充実
5. 国際交流福祉文化活動の取り組みの強化
   留学生会員や昨年関係した交流セミナーの継続的取り組みによる交流の強化促進
6. 新役員体制へのすみやかな移行と新企画への意欲的な取り組み
7. 全国大会・会員総会の開催と内容の充実

●第25回全国大会別府大会の開催
2014年10月4日（土）5日（日）　会場：別府市

以上の事業を支える予算は総額431万円余。現在の会員数は356名団体会員10団体。
学会のすべての活動は会員の皆さまからの会費で支えられています。会費の納入にご協力ください。（事務局）

福祉文化の交差点②

～学会員から3回に分けて福祉文化のルーツを考える視点で、ご寄稿いただく新コーナーです～

語り部の森
驚きの介護民俗学

斎藤遙山（群馬県）

薗田先生と磯部さん、木村さんに誘われて、六車由美さん著『驚きの介護民俗学』の読書会に参加している。一昨年の常民大学合同研究会が「福祉のフォークロア」をテーマとし、氏に「介護民俗学とその実践」の講演をお願いし、小子もそこで地域福祉史の報告をし、従って六車さんのお話を聞いていた、そういう縁である。

六車さんは、民俗学の元准教授だが、大学教員から介護職員に転じ、現在は沼津市の通所施設の責任者として介護現場にいる。

当初、彼女は回想法の勉強会に参加しつつ、利用者の「聞き書き」を行っていたが、個人史に踏み込まないことに疑問を感じる。「とことんつきあい、とことん記録する」なかで、様々な経験を踏んで生きてきた利用者の人生に触れ、「忘れられた日本人」がまだまだ介護施設にいることを実感し、歳月が培った生活者の智慧に感嘆する、キーワードは「驚き」だった。

「人生のターミナルケアとしての聞き書き」は、利用者と協働してつくる「思い出の記」につながり、そこでは両者の関係を、一時的だとしても、逆転させる、介護者はまさに教えを受ける「生徒」になっていた。

「同じ問いの繰返し」は介護現場ではよくあるが、彼女は個人史に留意しながら、それが「同じ答えの繰返し」を求めるものであり、その予定調和が演じられることによって、「痴呆」といわれる利用者の立ち位置と安心が確保される、これは民俗儀礼に似ているという。

介護という作業は「死への準備」でもあり、それゆえ「看取りの民俗学」が要請される、苛烈な条件のもとにあっても福祉は「生命讃歌」でなければなるまい。

六車さんは「驚き」をキーワードに、民俗学の手法（聴取り）でもって、介護現場に一つの風穴を拓いた。勿論、介護現場に「驚けない」現実があることは、彼女自身が承知している。しかし、それで「驚かない」ようになれば、人間理解の基本のはずの福祉が、人間から離れていくことになってしまう。

「福祉文化」とはそういう「現実」に異議を申立てることから出発したのであり、「驚く」ことの発見、つまり「介護学」は人間学であり、であればこそ、豊饒な語り部の森を、ともに学びながら彷徨うことなのだ、そう教えてくれるのだ。

新会員紹介

●2013年9月30日までにご入会された方のお名前と所属ブロックをお知らせ致します。（敬称略）

個人会員：
杉本　博、政井　英昭（北陸）足立己幸、片山　由香里、佐藤　亜希子、清水　海隆、谷口　友子、田村　みどり、中川　尚子、はせがわ祐希、針谷　順子、松沼　記代（関東）

原稿募集中！！
～福祉文化実践報告集～

現在、第8号の原稿を募集しています。これまでの実践を「福祉文化」の視点で見つめ直す、いいチャンスかも？そして、その実践をぜひ、ご紹介ください。

締め切り 2013 年 12 月末日。詳細は、日本福祉文化学会 HP『福祉文化実践報告集』のページをご参照ください。

生前のご活躍を偲び、謹んでご冥福をお祈りいたします。
村上雅亮 様
馬場哲雄 様